

博多湾の海岸ごみはどこからやってくるのか

地域看板の漂着から見える都市ごみの漏出

九州大学大学院
工学研究院附属環境工学研究教育センター
テクニカルスタッフ 木下 英生



本発表は、筆者が福岡市東区でのボランティア清掃に従事する過程で、都市河川から流出したと推測される他地域の看板を目にする事例がいくつかあった。
事例をもとに、河川を経由した内陸部からの流出実態を明らかにし、都市ごみの漏出を抑制するための啓発とすべく、2020年以降の観察記録を取りまとめたものである。
図1は、福岡市東区の沿岸部に漂着した地域看板と、その所在地の位置関係を示したものである。福津市の勝浦浜では、粕屋町の地域看板の漂着を確認した。*写真1
このことから、福岡市の河川から漏出した都市ごみは、潮汐や潮流によって、和自方面に押し込まれる流れと、玄界灘へと流出する流れがあることが考察される。

福岡市東区の沿岸部に漂着した地域看板と所在地の位置関係【図1】

事例紹介 東区沿岸部に漂着した地域看板



事例1
2021.05.22 福岡市東区 和自にて【写真2】
室見川河口より5.5km上流の早良区田隈より流出。金屑川を経由し博多湾へ流れ出た後に海の中道大橋をくぐり和自干潟へ漂着。



事例2
2021.07.25 福岡市東区 雁ノ巣にて【写真3】
那珂川河口より8.5km上流の南区日佐より流出。那珂川を経由し博多湾へ流れ出た後に海の中道大橋をくぐり雁ノ巣レクリエーションセンター付近の海岸に漂着。



事例3
2021.08.22 福岡市東区 奈多にて【写真4】
多々良川河口より4.2km上流の粕屋町より流出。多々良川を経由し博多湾へ流れ出た後に海の中道大橋をくぐり奈多の博多湾側に漂着。



事例4
2023.10.06 福岡市東区 大崎(志賀島)にて【写真5】
多々良川河口より11.3km上流の志免町より流出。宇美川を経由し博多湾へ流れ出た後に能古島を横切り志賀島の大崎の海岸に漂着。

河川から流出する都市ごみ

私たちが暮らす目線から河川を覗き込んでも川が多くのごみを運んでいると実感を持つことはあまりない。
しかしその実態は目を覆いたくなるほどの悲惨な現実がある。右の“写真6”は、2021年1月に多々良川河口にて筆者が撮影したものである。
一見自然豊かな河口干潟の葦原には数えきれないほどのペットボトルが堆積し、これを取り除いた下にはレジ袋や食品のパッケージ、空き缶、空き瓶がまるで地層のように幾重にも重なっている。
河口干潟にとっては受難であるが、しかしまだ海洋流出を阻む救い手とも言える。しかし、大雨が降れば川の水位が上がり流れの勢いも増すため、これらは一気に博多湾へと流出する。
また、多々良川に限らず、海へと流入する河川は、堰を跨がない限り海の潮汐の影響を受けるため、植生の妨げにより留まっていたプラスチックごみも、満潮時に浮遊を始め、干潮時にはあたかも掃除機で吸い込まれるかのように海洋へと放出されてしまう。



2021.01.24 福岡市東区 松崎 多々良川河口にて【写真6】

発生源は“あしもとから”

これまで、都市から発生したごみが河川を経由して博多湾へと流出していることを述べてきた。しかし、流域のすぐ傍が発生源と断定はできない。
右の“写真7”は福岡の沿岸部で頻りに拾うことができる漂着ごみのひとつである。この正体は、雨水枥に設置されたバケツに付属する注意書きのプレートである。*写真8
脱着を容易にするためか、許容量を超える雨水が流れ込んできたり、異物が流れ混んできた衝撃で簡単にプレートが外れてしまう構造になっている。
プレートの大きさは、幅 65mm・高さ 42mm・厚み 2mmと決して小さなものではない。
このもの自体が自然界に流出することも問題ではあるが、私たちの暮らしの足元にある雨水路は、やがて海へと流れ出す通路になっていることがこの漂着ごみから推測することができる。
これらが間もなく雨水路を通過できてしまうのならば、これ以下のサイズのごみも同じく雨水路をたどり海洋流出していると考察される。



2021.01.24 海の中道海岸で拾った雨水枥バケツのプレート
W:65 H:42 D:2 (mm)【写真7】

雨水枥のバケツとは【写真8】



駐車場や施設周辺にある「うすい」と書かれた小さなマンホール



蓋を開けるとバケツが入っている。



バケツには黄色いプレートが付属

謝辞
このポスターは、2023年度日本財団「海と日本プロジェクト」の補助金交付により制作されたものです。この場を借りて深く御礼申し上げます。
また、九州大学工学研究院清野聡子准教授には、研究の進め方や枠組みについて有益な助言をいただきました。

